

仙台教区報

発行 カトリック仙台司教区
 980 仙台市本町一丁目2番12号
 電話 〇二二一 222-七三七一番
 編集・発行人 笹気直哉

何かが変わったのか



第一回全国会議（NICEI）を通して日本の教会が変わったのでしょうか。

第二バチカン公会議の後、目に見える様々な事柄が刷新され、あたかも教義そのものが変わったかのように受けとめて、ともすると失望された方々が以外に多く見受けられました。今、また、同じことを繰り返すのでしょうか。「今までこうだったのに、また変な新しいことを始めるのか」と。

確かに、目新しいことや耳新しい言葉などがあります。たとえば、日本の教会について信徒と司教と司祭が同じテーブルに付いて話し合ったこと。そのために、全国の信者が同じテーマで考え話し合い、意見をまとめたこと。これらのことは、日本の教会にとって初めてのことです。

「信仰を、掟や教義を中心としたとらえ方から、『生きること、しかも、ともに喜びをもって生きること』を中心としたとらえ方に転換したいと思います。」（日本カトリック司

教団）ともに喜びをもって生きよう」の六頁冒頭）という新しさ。

約二千年も昔のこと、イエズスという方が将来、教皇とも司教ともなろうという弟子たちとともに、同じテーブルを囲んで食事をし、神様のことについて話し合っていました。

それはいつものことなのですが、世にいう人はいえないような職業についている人とか罪人と呼ばれるような人も一緒にいました。イエズスという方がつね日ごろおっしゃるのは、「神様はいつもわたしたちとともにいてくださるのだから、どんなことがあっても喜びをもって生きなさい。」ということ。そして、人々とともに「互いに愛し合いなさい」という命令をされていました。

NICEIという出来事で、何かが変わったのでしょうか。変わったものではありません。出発点に立ち帰って、もう一度気持ちを入れ替えて、旅立ちとうとしているのです。

新しい気持ちで、という意味での新しさはあると思います。しかし、教義が変わった訳ではありません。

では、新しい気持ちで何をするのでしょうか。それは、もともとそうだったことをこれからの日本の教会が新しい気持ちでやってくるのです。

みことばによって
 律法学者は、掟を通して神様を伝えようとしてきました。

イエズスは、罪人を通して神様を伝えようとしてきました。

わたしたちもイエズスのように、生きていきたいと思えます。

そのためには、まずはイエズスのことをわかる必要があります。

とてもよく分かる方法のひとつが、聖書を読むこと。それも、みんなとともに読むことなのではないでしょうか。

教区司祭人事異動

佐藤守也師（東京カトリック神学院院長）
 豊屋町教会主任司祭

小さき花幼稚園園長
 斎藤石雄師（豊屋町教会主任司祭）

引退

仙台教区に新たな神学生

田中丈夫君が今年四月、仙台教区神学生として東京カトリック神学院に入学しました。

教区神学生は、現在五名となりました。



第二十二回 司牧評議會 定例会議開催



三月二十一日(月)仙台・元寺小路教会にて、第二十二回司牧評議會定例会議が開催された。出席者は、佐藤司教をはじめ二十一名。開会の祈り、議長選出(相沢裕・福島県代表)の後、佐藤司教が次のような挨拶をされた。「司牧評議會が年に二度では足りないという声を聞くが、この集いが教区のために具体的な力となるように願っている。昨年のナイスを教区としてどのように受け止め、具体的に何をやっていくかが大切で、実りある討議を望みたい。折りも折り、東北が見直されてきており、現代的動きを取り出して見てはどうか。社会の動きに遅れないように、教会の歩みも合わせていきたい。」



※会議の内容
「ともに喜びをもつて生きよう」の共通理解のために、会議に先立ち笹気師の発表がなされた。(注：今回司牧評は、評議員がナイスの目指した「開かれた教会」ということ、そして、司教団メッセージに強調されている「教会の姿勢や信仰のあり方を見直し、思いきった転換を図らねばならない」という考え方がどのような背景・歴史の流れから出てきたのか、これから教会の進む方向は、等について共通理解を持つために、司祭の生涯養成研修会(一九八八年一月)に参加した笹気師の

発表を聞くことから始められた。

※発表の要旨



一、教会がどういふ方向に進めばよいかを考える出発点として、少なくとも過去百年間程の歴史から教会を見ると、最大公約的に言えば、次の二つの特徴が上げられる。そしてこの発生は、近世初頭(十五世紀)十六世紀初めに求められる。

- (1) 閉鎖的教会：新大陸発見という世界の広がりはあつたが、文明や宗教に対して自己を閉ざし、また、対プロテスタント意識から、カトリック教会の自己の絶対性を強調したり、教会は聖なる場であつて、俗なるものではない、と自己を閉ざしていつた姿が見られる。
- (2) 制度的教会：ここではヒエラルキー、秘跡、教会法が強調された。

もちろん、この教会には、永遠・不動・安定・聖性等の魅力もあつた。しかし、現実遊離・人間不在とも言える状況という問題点も起こつた。これが第二バチカン公会議が開催される背景と言える。

- 二、第二バチカン公会議の特徴は大きく五つある。
- (1) 教会が閉じていた自己を開いて行つたこと：例えばエキュメニズムに見られる「他宗教」ではなくて「諸宗教」という理解、社会や政治への発言。
- (2) 現代世界への適応・刷新ということ：典礼が各国語で行われる、修道生活の刷新、教会組織の変革など。
- (3) 教会を制度としてよりも信仰者の集い・

神の民と見る理解の仕方。

- (4) 教会の権威は自己のものでなく、神とキリストに由来するという理解。
- (5) 教会の目的は自己の繁栄ではなく、すべての民族のためというものである。

☆ 根本的転換

- (a) 制度としての教会から、神の民としての教会へ↓「信徒の教会」
 - (b) 現実喪失から、世界における・世界のために奉仕する教会へ↓「開かれた教会」
- 三、公会議以後、教会はどういう動きを取つたか、その現象は？

- (1) 感激と希望。
- (2) 混乱と困難の認識：思つたほど簡単ではないという反動と後戻り。
- (3) (2)の再認識と地道な出発

この様な動きには「過去の教会観のとりわれ」が一貫して見られる。つまり、(a) 遺産にしがみつく姿勢(グレゴリアン聖歌など)
(b) 閉じた教会に目が向き、関心が外に向かわない、(c) 聖職者中心にこだわる(ローマ・司教中心など)、(d) 制度的なものを教会の中心的なものとする(聖職者には教導職へのこだわり、責任感、戸惑いがあり、信徒は受け身の態度)。

しかし、逆行には未来が無い。そこで、日本ではナイスへの動きが出てきた。
四、日本の司教団が求めた信仰についての信徒の意見を分析すると以下のようなになる。
信仰とは聖なる世界(日常生活とのギャップ)／掟を守るといふ意識／個人の魂の救い

／／典札・信心で養われ支えられるもの／／教義と生活の接点を見つけることが困難／／教会とは司教・司祭・修道者のもの（「神の民」という教会理解がなされていない）／／教会は社会・政治問題に関わるべきでない、などが見られる。従って、生活から信仰を、社会から教会を、という見方がナイスで強調されることになった。

五、これからの教会のありかたを考えるとキーワードとなるのは「共に」ということではないか。律法学者は掟を通して神に近づこうとしたが、イエズスは罪人を通して神に、という生き方をした。教会はイエズスをモデルとして歩み、直接イエズスに出会う必要がある。それは、信者（信者も聖職者も）が聖書と一緒に読み、共に語り、共に実践する、また、共に生涯養成を、ということでも可能になるのではないか。

△意見交換▽

☆反省も必要だろうが、現状の教会の持っている「良さ」もナイスで話されているのではないか。批判だけでなく、良さも表に出してほしい。

☆確かにその通りで、「今ある組織・活動の良さを見直す」という意見もあつた。教区でこれを現実化するとき、司牧評の実力がどれだけあるかを見、力をつけながらやっていかなければならないだろう。

☆「信徒の時代」と言われるが、まだ動きが見られない。信徒にも責任があるろうが、司祭にも大きな責任がある。この言葉を司祭の責

任回避に利用して欲しくない。また一つの現象として、教会の会議には（合同会議・信徒連絡協・司牧評さえも）司祭の出席率が悪い。積極的な参加を望みたい。

☆司教団の「プロジェクト・チームを作る」とは、これから考えるのか、という批判があるが、プロジェクト・チームから何かが出てくるのを待つて、それを現場で行うということではない。なお、このチームには司教団から五人（佐藤司教もその中の一人）これに信徒も司祭も加わる。

※議事

一、信徒と司祭が一緒に研修する「生涯養成の場」の設置について。

△生涯養成の場について▽

☆一緒に研修することは大切だと思う。教区本部スタッフの会議でも養成のチームを作っていくこうと考えているから、それを司牧評に取り入れたら教区の働きとして生きているのではないか。

☆信徒と司祭が一緒にという場合、具体的にどういう形になるか不明だ。

☆「生涯養成の場」とは何か、人によって概念の捉え方が違うからはっきりさせなければならぬ。「話し合いの場、体験の場」なのか。

☆研修と養成では目的によって形が違ってくる。生涯養成とは、（信徒と司祭が）一緒に勉強することだろうから、スタッフを作り、各県に向いて地域の全部の人々に話しをするという形がよい。

☆生涯養成の「場」ではなく「機関」を設置するということだろう。既存の活動グループに奉仕し、信者を目覚めさせるプログラムを作る「宣教チーム」の設置を考えたらよい。

△内容について▽

☆内容は、信徒が司祭に何を望むか、また司祭の要求は何かを取り上げてほしい。このような要求（希望）を司牧評で受け止めてほしい。

☆教会の現状は、ナイス報告会を開いても参加者が少ないし、そういう中で「生涯教育の場」を決めてもどうしようもない。今、ナイスが何を訴えるのか、今日の笹気師の話のようなものこそっと皆に知らせたい。

☆司祭と信徒には役割の違いがあるろう。その接点を見なければならぬ。

☆開かれた教会になるために、今まで培われたものの良さやイエズスの生き方を見つめながら、自分の心を意識することからスタートしなければならぬ。（教会の）基本姿勢を徹底してほしい。

☆パチカン公会議から二十年以上経つたが殆どの信徒は理解していない。半強制的にでも信徒が参加できるように養成の場があればよい。

☆第一回はナイスを取り上げてほしい。
☆「司祭の交流」、「司祭と信徒とが対話できる場」を望む。
☆何をやるにしても「人と金と場所」が

問題で、三ナイづくしでは何もできない。我々一人一人が教師であり生徒である、金は自前でやる、始めにはただ「共にある」という事でもいいではないか。



△ 結 論 V

☆「生涯養成の場・機関を設ける」事だけを今回決めておく。

☆中身・内容(養成チームのメンバー構成、チームの活動内容・研修の中身、研修スタートの時期など)については、どのようなものを望むか、改めて各県、各小教区から意見・提案を求むる。

提案は六月の末までに役員会に集め、次回司牧評に提出する。

二、青少年の育成について

☆教区の青少年司牧担当司祭として笹気師が任命されている。各県・各小教区の協力をお願いする。青少年活動が県単位の大きな企画の場合には出向けるだろう。小教区単位の夏期学校の手伝いなどには神学生に行ってもらっている。

(注:この件、及び、婦人会の教区レベルでの交流については、今回、司牧評では討議されなかった。)

三、仙台教区「海外宣教の日」を設けることについて。

教区から派遣する宣教者を援助するため、特別に祈り献金する、仙台教区独自のものとして
☆毎年二月第一日曜日を「海外宣教の日」とする。

☆献金は教区会計の「海外宣教基金」に繰り入れる。

※質疑応答の結果、原案(二点の☆印)通り賛成、可決された。

四 報告、話題、その他。



(1) 聖週間の典札について(佐藤司教)

試用の典札書がいくつもあり内容がまちまちなので、教会によってやり方が違うだろうが、その場でふさわしいことをやるということでしょう。

(2) カトリック・センター(仮称)について

(司教総代理・梅津師)

基本構想に関して、教区司祭団の中で全体の流れとしては方向が見えてきた。「検討委員会」は今年一月から動いているが、教区全体にアンケートをとるまではまだ行っていない。「建てる」こと自体にはだれも反対しない。具体的なことでは合意を得るための作業をしているところである。見切り発車で、いい加減なことはできない。九月の司牧評に「こういうところまで合意できた」、というふうにして持っていきたい。

(3) 司牧評は大きな問題を扱うから、泊まりがけでじっくり時間をかけて話したい。また信徒連絡協の会長も司牧評に出席してもらいたい。

|| 泊まりがけの司牧評開催については役員会で検討する。県の信徒連絡協には仙台(司牧評役員会なり教区本部)から出向くことも考えられる。また、このような集まりも養成の場としたらよい。

(4) 司牧評には女性の評議員がいない。女性の発言の場を作ってほしい。また、青年代表も加味してほしい。

☆それには規約の改正が必要になろう。

☆教区長直任ということで参加してもらおうこともできる。

.....

司祭評議会定例会議開催

.....

三月十四日(月)仙台・元寺小路教会にて佐藤司教以下十一名の司祭が集まり司祭評議会が開催されました。

✪ 議事内容(抜粋)

- 一、ナイス以後の仙台教区を取り組み
- (1) 近隣小教区の協力・交流を進めること。
- (2) 信徒会のあり方が教会の活性化に深く関係しており、その役割は重大である。司教団の言う「思い切った(姿勢・意識の)転換」をして教会本来の「外に働きかける」使命を果たすために、司祭も信徒もそれぞれの本来の役割を理解しながら信徒会のあり方を見直す必要がある。そのために、信徒と司祭が共に養成を受けられる場を設置すること。

二、報告・話題

(1) 司祭大会について

☆期日:六月二十七日(月)から二十九日

(水)。☆場所:禎祥苑。☆大会テーマ:

「ナイスと仙台教区」あるいは「ナイスを表現する。☆講師:中央協議会の神林宏和師。



アマゾンからの手紙
パウロ 首藤 正義

日本を発つて、もう一ヶ月が過ぎようとしています。

皆さん、お元気ででしょうか？私は今のところ何の病気もせずに、元気に過ごしています。在仙中、また今回ブラジルに来るにあたっては皆様がたからの励ましと心尽くし、心から感謝致します。ここに改めて御礼申し上げます。

今、この便りをベレンで記しています。ベレンという地名はベツレヘムから来たもので百万都市です。なかなか奇麗なところで、十月に行われるナザレの聖母教会(ノッサ・セニョーラ・デ・ナザレ)の聖母行列はブラジル中でも有名だそうです。

この一ヶ月を振り返り、今までの歩みとこれからの予定をお知らせして、最初の報告としたいと思います。

二月五日、小雨降るサンパウロ空港に着きました。二人の神父様と三人のシスターが出迎えてくれ、ホッとする間もなく市内にあるPANIIB(日伯司牧協会)まで、車で行きました。PANIIBがサンパウロ滞在中の私の宿になりました。

サンパウロには、二月二十三日サンタレーンに行くまで滞在することになりました。これはPANIIBの神父様がたの配慮だったよ

うです。即ち、まっすぐにアマゾン地域に行くのでは余りにもショックが大きすぎるのでサンパウロで足慣らしというか、心の準備、ブラジルに馴れてもらうこと、そしてブラジルの色々な側面を見て欲しい、ということでした。

サンパウロ滞在中、皆から親切にされ、色々な所を案内して頂きました。特に日本人宣教師の働いているところを訪問することができました。そのいくつかをここに紹介いたします。

一、モジとピリチーバ・ミリン

サンパウロから車で二時間弱のところ、コンペンツアル会の松尾神父様が働いています。野菜作りをしている日系人の多い所でここで作られた野菜はサンパウロの人々の食卓に上るのだそうです。ここでは今、大きな集会所(体育館としても使う)の建築中です。大祝日の時や雨の日でもこの地域の人々が皆集まることができ、またカテケージスなども行うことができます。ブラジルでの最初の日曜日のミサをモジ、ピリチーバ・ミリンで捧げることができました。

二、アモレイラ、サン・ジエローニモ、ロンドリーナ、コロニア・エスベランサ
これらの地域はサンパウロから夜行バスで七時間かかるところです。

アモレイラには長崎純心会のシスターたちがいて、保育所とお年寄りのお世話をしていました。この会のシスターたちは、サン・ジエローニモでは横浜教区の佐々木神父様が始

めたライ患者のための病院で、看護婦としても働いています。

ロンドリーナは大きな町です。ブラジルの大きな町にはどこでもフアベラと呼ばれる貧民街があります。慈生会のシスターたちはフアベラの中に保育所をつくり、フアベラの子供達のために働いています。

コロニア・エスベランサには札幌教区の伊戸井神父様が働いています。このコロニアにはかつて一二〇家族がいて、カトリックだけのコロニアとしてはブラジルで唯一のところだそうです。三年前に五十年祭をし、今では五十家族程が残り、その中四十六家族がカトリックです。コーヒーで栄えたところですが、今ではそれも駄目になり穀物作りでなんとかしています。ブラジルでは五十年以上続いているコロニアは少ないそうです。伊戸井神父様は近くのアラボンガスと他の地域の司牧にも携わっています。

三、サンゴンサル教会

サンパウロの中心街、東西に走る地下鉄の交差するブラザ・ダ・セ(駅名)の近くにカテドラルがあり、その裏向かいにあるのがサンゴンサル教会です。三百年の古い歴史を持つ教会で、イエズス会が受け持ち、日系人司牧にあてられた教会です。日本人、日系人の神父様は四人住んでいます。岩手県出身の堀江神父様が主任司祭です。彼はPANIIBの副会長、ホリゾンテという月刊雑誌の編集責任者、青年司牧の担当、そして数え切れないほどのいくつかの役割を担い、身を粉にして



頑張っています。サンパウロ滞在中はその仕事に加えて私のお世話までして頂きました。頭の下がる思いです。そして勇気づけられました。感謝です。

サンパウロ滞在中、カーニバルの期間と重なり、お陰でカーニバルも見ることができました。またサントス海岸の方にも出掛け、ほんの少しではあるが、ブラジルのいろいろな側面を見せて頂きました。

サンパウロでは殆ど日本語の世界にいましたし、しかも気温もさほど高くなく、むしろちよつと膚寒いかなどと思える日もありましたので、ブラジルに来たのだという思いはあまりしませんでした。

でも今は違います。二月二十三日夜、サンタレーンに着きました。サンパウロとは全く異なるサンタレーン。ポルトガル語だけの世界。神学校に一週間滞在しながら、外人登録等を済ませ若い神学生たちが語るポルトガル語に分らないながらも耳を傾け、幾つかの共同体(コムニタージ)を見ることでできました。

そして今、ベレンにいます。ポルトガル語を学ぶためブラジリアに行く途中です。

三月四日から六月二十四日までブラジリアのOENFIで約四ヶ月間、言葉を始めとしてブラジルの文化、教会の動きなどを勉強します。



ブラジル



※※※※※※※※※※※※※※※※

※ シリーズ「知っておきたい仙台教区」※

※ 教区司牧評議会 (その3) ※

※ 教区全体の最も重要な会議 ※

※※※※※※※※※※※※※※※※

前回、どういふ問題が司牧評の議題として取り上げられるのか、ということを見ました。それは「教区(教会)を構成しているわれわれ信者の生き方にかかわることほどのようなことでも」議題となり得る、ということでした。どのようなことでも議題として取り上げながら、われわれの生活や活動が福音に一致するように、また、教区(神の民全員)がキリストの証人となるように進んでいきましよう、というわけです。

今回は、では、どのような手順で議題として取り上げられ、「実際の結論を出す」まで進められるのか、について見ましよう。

規則第三条の2項と3項は次のようになっています。

第2項：「本会の審議に対する議案は、教区長よりの諮問事項および地区内いし小教区の各種グループよりの提案等として提出される。」

第3項：「教区の司祭・修道者・信徒は、教区民の一員として、直接本会に提案することができる。」

つまり、教区内の信者はだれでも、個人でもグループでもあるいは小教区、はたまた県の信徒連絡協議会の名でも、議題を提案することができます。これを仮に「現場」からの

提案と呼びましよう。この「現場」と司牧評の関係を図で表すと次のようになります。

☆現場：議題の提案

☆司牧評役員会(教区事務所が事務局)：提案の中から定例会議にかける議題を選定し開催通知で知らせる

☆現場：議題について現場の意見をまとめ、県の代表者が定例会議に発表する

☆司牧評(定例会議)：議題について教区としてどう取り組むか討議し結論を出す

☆現場：実践



：新しい提案



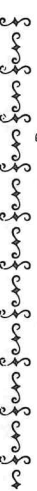
ひろげよう

看りの輪

★会員募集中

仙台・光ヶ丘スベルマン病院内

022(257)0231



【編集後記】ナイス以後の教区内での動きが

ゆつくりではありますが、司牧評議会・司祭評議会・本部スタッフなどを通して次第に行きわたりはじめています。一人一人のアンテナを十分に張り巡らせてキャッチしていきたい

ものです。(笹)